



ブレイク・タイム

ちょっとこぼれ話 XLIV

濱口 恵子

今回もブレイク・タイムと行きましょう。初の2回連続のブレイク・タイムです。

前は、ちょっと堅苦しくて、どこがブレイク・タイムなの?と思われた方もいらっしゃるかもしれません。私も、少々熱が入ってしまいました。何しろ、書きたいことが山のように一杯ありまして…。

前回、スペースの関係で、ちょっと言葉足らずだった部分がありましたので、ここで補足説明をしておきたいと思います。

古代ギリシア人は、自分達のことを、異民族バルバロイと区別して、ヘレーネス Hellenes と呼んでいました。ヘレーネスは、プロメテウスの子のデウカリオンとピュラーの子であるヘレーン Hellen から来ています。古代ギリシア人は、ヘレーンが古代ギリシア人の祖で、自分達を彼の子孫と考え、ヘレーン一族という意味で、ヘレーネスと呼んでいました。ヘレニズム Hellenism も、ヘレーネスから派生した言葉で、ギリシア精神、ギリシア文化を指します。トロイアのヘレネー Helene とは、スペルが違いますのでお間違えなく。

歴史では、アレクサンドロス大王以降の、東方文化と融合したギリシア文化やその時代を指します。どちらかと言えば、こちらの方を思い浮かべられる方が多いのではないのでしょうか?でも、前回と今回のこのコーナーでは、前者を指しているので、心にお留め置きください。

さて、今回は、軽く流したいと思います。

ヘレニズム、つまりギリシア文化・ギリシア

精神が、西洋文化の3大源流の1つと、前は書きました。西洋では、新しいものが発見・発明されたり、新しい概念が生まれた場合や、ただ単にもものに名前をつける場合でも、ギリシア・ラテンに戻って命名することが、多々あります。また、動植物の学名は、基本的にラテン語で付けられてきました。

命名の方法としては、普通名詞や固有名詞の単なる借用による命名、普通名詞や固有名詞を借用して語尾変化をさせての命名、いくつかの言葉と言葉を組み合わせる繋ぐ、造語による命名等があります。

今まで、何回か、単語の語源について触れていますので、重複する例もありますが、ご容赦ください。

具体例を挙げます。まず、簡単な方から。そのままの形で借用しているものとして挙げられるのが、かの有名なスポーツ用品メーカーのナイキ Nike。これは、勝利の女神ニーケー Nike の名をそのまま借用しています。読み方は、英語読みになっています。

日本の有名なカメラ・内視鏡メーカーのオリンパス、これはオリュンポスの英語読みです。

ホンダの車オデッセイは、言わずと知れたホメロス作と言われている、トロイア戦争のギリシア方英雄オデュッセウスの故郷への帰還物語「オデュッセイア」の英語訳 Odessey をそのまま借用しています。

次は、普通名詞や固有名詞を借用し、名詞接尾辞をつけるなどの語尾変化をさせての命名方法です。

これには、ウラニウム uranium、ヘリウム

helium、セレンウム selenium、バリウム barium 等の元素がありました。

さて、一番多いのが、何と言っても、いくつかの言葉を組み合わせて繋ぐ、造語による命名法です。組み合わせは、ギリシア語同士、ラテン語同士、ギリシア語とラテン語の混合と、いろいろあります。いくつかご紹介します。

人類が初めて宇宙に飛び出した時、宇宙飛行士という、新しい概念が生まれました。宇宙飛行士を表す英語は、astronaut です。ギリシア語源の星・宇宙を意味する連結形(造語の1要素) astro-に、同じくギリシア語源の水夫を意味する naut を結合させて作った言葉で、宇宙空間を飛行する人、宇宙飛行士となります。ロシア語では、cosmonaut と言います。ギリシア語源の宇宙・世界を指す連結形 cosmo-と naut を結合させた造語です。ラテン語の中には、ギリシア語源のものが多くあり、astro-、cosmo-、naut はラテン語でも同様の意味です。英語で cosmonaut と言うと、特にロシアの宇宙飛行士を指すようです。因みに、人類初の宇宙飛行士は、1961年ソ連が打ち上げたボストーク1号に乗っていたガガーリンです。

ファックスは、今は省略して Fax と言っていますが、元は、ファクシミリ facsimile という造語です。fac は、ラテン語の作るという動詞 facere の現在・2人称・単数の命令形 face の省略形 fac に、同一・類似を表すラテン語の単語 simile を結合させた造語です。同じものを作れ、同じことを為せという意味です。それを、現在は、Fax ファックスと省略して使っています。“cs”は“ks”の音であるので、置き換えて“x”で表しています。

telephone という言葉は、遠く・遠方・距離を意味するギリシア語由来の連結形 tele-と、同じくギリシア語源の音・声を表す phone を繋いだ単語です。遠くに音や声を伝えるもの、つまり、電話機です。

telegraph は、tele-と、書かれたものを意味するギリシア語源の graph を結合したもので、

遠くに向けて書かれたもの、電報を表します。

私達が略してテレビと呼んでいるものは、正しくは television という言葉で、ギリシア語源の tele-と、ラテン語の見るという動詞 videre から来た vision とが結合した言葉です。遠くから発信されたものを見る道具、ということでテレビとなります。

ギリシア語、ラテン語を使った造語の例を挙げると、枚挙にいとまがありません。医学用語でも、圧倒的に多いのがギリシア語源の言葉です。ギリシア語は、語彙も豊富で、造語に向いている言語と言われているので、命名する時の拠り所となっているのでしょう。

古代ギリシア・ローマから遠い現代においても、このように、あちこちでギリシア・ラテンのかけらが、顔を覗かせています。

絵の展覧会1つを取ってみてもそうです。ルネッサンス期以降の絵のテーマとしてよく出てくるのが、聖書、キリスト教にまつわるエピソードやギリシア神話・ローマ神話のエピソードです。絵のタイトルとして、エピソードの主人公の名前や場面等が記されていますが、その背景やストーリーの説明がない場合も多く、西洋文化に明るくない人には、その情景は、容易には想像しがたいと思われます。

ところが、西洋人にとっては、聖書、キリスト教、ギリシア神話は、自分達の文化の一部ですので、寸時に理解できたりします。言い換えれば、私達も、聖書、キリスト教、ギリシア神話等の知識があれば、展覧会の絵への理解が深まり、何倍も楽しめるということになります。例えば、「ペルセウスとゴルゴーン」とか、「ダナエーと黄金の雨」、「パリスの審判」等のタイトルを見て、すぐにそのシーンを思い浮かべられる人は、かなりのギリシア神話通と言えるでしょう。

私達は、意識していなくても、西洋文化に取り囲まれています。ならば、少しでも理解を深めた方が、一味違った楽しみ方ができると思いませんか。